

イギリスの国民性

——イギリス学序論——

武 井 邦 夫

1 日本とイギリス

日本は「アジアのイギリス」であるといわれているが、確かに似ているところが多い。第一に両国は共に大陸周辺に位する島国である。第二に古い伝統を有する君主国である。第三にかつては共に大海軍国であり、現在でも海洋国家である。明治以後の日本は海軍、鉄道、郵便制度等にイギリス式を導入した。また日英同盟を結んで、第一次世界大戦では同じ陣営で戦った。他方、日本は陸軍、大学、法律（特に憲法）、医学等にドイツ式を導入し、第二次大戦ではこれと組んで米・英と戦った。日本における親英派と親独派の対抗関係を追うだけで日本の近代史の相当部分が解明できるだろう。

しかし、日・英両国は違う所も大分多い。同じ島国といっても対岸のヨーロッパ大陸まで最狭部 34km のドーヴァー海峡と、その約 7 倍はある朝鮮・対島海峡とでは、兩岸間の交通に及ぼす影響には質的な差があるし、また大西洋と太平洋とでは広さが全く違う。何よりもイギリスは陸半球の中心にあるのに対し、日本はその東端部にある。

こういった違いを最もよく物語るのは、近世以降の歴史の違いである。16世紀までは日本とイギリスはほぼ平行している歴史的展開を持っている。弥生時代の天孫族の日本征服は5世紀以降のアングロ・サクソンによる侵入に似ているし、仏教、キリスト教共に大陸から渡来したし（仏教の日本渡来…538年、アウグスチヌスのケント上陸…597年）、1066年のノーマン・コンクエストは東国武士団による鎌倉幕府の設立（1185年）にたとえられるし、英仏百年戦争（1338～1455）は元寇（1274・1281）以降和寇（13世紀～16世紀）を経て秀吉の朝鮮出兵（1592～3、1597～8年）にたとえられるし、またヘンリー7世によるバラ戦争の終結とチューダー王朝の開始（1485年）は関ヶ原の戦い（1600年）による家康の天下統一に比せられるであろう。

しかし、それ以降の歴史は全く対極的である。日本が鎖国政策（海外渡航禁止令…1635年、ポルトガル船来航禁止令…1639年）をとっている間に、イギリスは1588年にスペインの無敵艦隊を撃滅して海上覇権をにぎり、また1583年にはニュー・ファウンドランドに同国初の海外植民地が建設された。メイ・フラワー号の出帆は1620年であった。それ以後の歴史の進行については今更記すまでもない。明治維新前後よりスエズを経てヨーロッパへ西航する日本人は、その寄港先が全てユニオン・ジャックをひるがえしているのを見て、今更のように彼我の国力の差を痛感したことであろう。福沢諭吉のような文明開化論者が他面では強烈な国権論者であったのはそのせいである。そしてここに日本近代化の悲劇の種は蒔かれていたのであった。

維新後～第1次大戦までは日英両国の運命は並行していたが、それも束の間で、中国大

陸の覇権をめぐる対立は激化し、遂に第2次大戦の破局を迎えた。今日でも日本を見る目が一番厳しい国はイギリスであろう。さらに、戦後のイギリスと日本とでは経済的發展が対照的である。日本のG・N・Pは国民一人当たりでもイギリスを追い抜いたが、イギリス経済は成長率・生産性・インフレ率・失業率何れをとってもEC中最悪に近い。「日本に学べ」運動はイギリスでも始まった。サッチャー首相はその先登である。しかし、彼我の国状と国民性の差はあまりにも大きく、今日では両国人の共通点は日常の挨拶に天候を話題にすることぐらいであろう。

外国研究は結局自国研究の手段である。人間は鏡によって自分の顔を見る。外国は自国にとっての鏡である。同じ島国でありながら、日本と違う点がいくつかあるイギリスは彼我の違いをもたらすものが何であるかを気づかせる点で、またとない鏡である。それに太平洋を距てて隣り合う白人国には、カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド等アングロ・サクソン系が多い。イギリス研究の重要性について、これ以上述べる必要はないだろう。

2 風土的要因

イギリス (United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland, 略称 United Kingdom) は総面積 244,046 km² (日本…377,682 km²)、その中イングランドとウェールズ (England & Wales) …151,126 km² (62%), スコットランド (Scotland) …78,772 km² (32%), 北アイルランド…14,148 km² (6%), 人口総数 (1978年推計) 55,802,000人、その中、イングランド・ウェールズ…49,104 (千人) (88%), スコットランド…5,179 (千人) (9%), 北アイルランド…1,539 (千人) (3%), 人口密度はそれぞれ、325人、66人、109人、平均229人である。

これを他のヨーロッパ主要国と比較すると、面積では (1)フランス…547,026 km², (2)スペイン…504,782 km², (3)イタリア…301,225 km², (4)西独…248,577 km² (東独…108,178 km²) の順で第5位、人口では (1)西独…61,310 (千人) [東独…16,756 (千人)], (2)イタリア…56,697 (千人), (3)イギリス…55,822 (千人), (4)フランス…53,278 (千人), (5)スペイン…37,109 (千人) の順となる。人口密度は (1)西独…247人, (2)イギリス…229人, (3)イタリア…188人, (4)フランス…92人, (5)スペイン…74人, の順である。EC 諸国で一番密度の高いのはオランダ…341人、ベルギー…322人であるから、イングランド・ウェールズの325人というのは相当の高率である。日本は人口114,898 (千人)、人口密度309人である (以上何れも1978年推計)。

ただし、実感としての人口密度は日本の様に山地の多い国と、そうでない国とでは大分上記数字とちがいがあがある。イギリスの土地利用の特色は森林が少なく、牧場・牧草地が多いことである。総土地面積を(1)耕地、(2)樹園地、(3)牧場・牧草地、(4)森林、(5)その他、に分けて各項目の構成比を見ると次のようになる (但し、内

	耕 地	樹園地	牧場・ 牧草地	森 林	その他
イギリス	28.0	0.2	46.6	8.0	15.2
フランス	31.6	2.9	23.9	26.6	14.8
西ドイツ	30.0	2.0	20.9	29.0	16.0
イタリア	36.0	9.9	17.5	21.0	18.6
スペイン	31.0	9.8	21.3	30.7	6.1
日 本	11.8	1.6	1.4	67.0	18.0

水面を除くから、総計は100%にはならない)。

イギリスの森林が少なく、牧場・牧草地が多いのは、山地が少ないということの他に、特に同国は「羊が人を喰う」という語が語るように、大羊毛工業国だったことからくる。産業革命前には森林は殆んど姿を消し、このことがエネルギー源を木材から石炭へと転換させる動きを速めたという。この他、イギリスの特色は非ワイン生産国であることの現れとして、果樹園の少ないことである。これに対し、フランス、西独はほぼ同一型を呈していて、両国はこの点に関する限り双生児の感がある。スペイン、イタリアは大ワイン産出国として果樹園の比率が大きく、またイタリアは森林が比較的少ない。山地が多いのに森林が少ないのは禿山が多いことを物語る(以上、総理府統計局編『国際統計要覧』1980による)。

次に、気候を見てみよう。

イギリスの気候の特色は年間を通じての温度差が少なく、降水量が年間を通じてあまり変化しないことである。たとえばロンドンの年間温度差は13度Cだが、これを大陸諸国と比べると、ポルドー…15°、リスボン…12°と並んで明らかに海洋型を呈しているのに対し、ミュンヘン…15°、ウィーン…21°、ワルシャワ…22°、モスコー…28°等の大陸性内陸型とは異なっている。さらに降水量についてみると、ロンドンの降水量は610mmで、ポルドー…831mm、ミュンヘン…866mm、ウィーン…650mm、ワルシャワ…559mm、モスコー…630mm、リスボン…686mm、マルセユ…589mmに比べて大差はないが、ミュンヘン、ウィーン、ワルシャワ、モスコー等の内陸型が夏多雨、冬乾燥型であり、また地中海諸国がこの逆に夏乾燥、冬多雨型であるのに比べて、四季を通じてほぼ一定である点が注目される。もっともグレート・ブリテン島でも中央山地のペニン山脈以西と以東では降水量が全く違う。スコットランド西海岸のフォート・ウィリアム(Fort William)では1,999mm、イングランド西海岸のケズウィック(Keswick)では1,476mm、マンチェスターで859mm、南西部のプリマス…960mm、ファルマス…1,100mm、というように、東海岸側の600mm台に比べて軒並みに高い数値を示している。このような気候は適度な湿気を必要とする綿工業がイギリスの西海岸に展開する風土的背景を提供すると同時に、牧草の発育を促進し、低地に牧牛、高地に牧羊業を発達させる原因になった。もっとも夏期の日照を必要とする葡萄の生育には不適當で、一名ワイン文化といわれるローマ文明に直接浴した土地としては唯一のワイン非生産国である(以上、Philips' MODERN SCHOOL ATLAS, 1976年版による)。

私のロンドンでの経験(1979.10～1980.5)では、春・秋が比較的短かく、また天候が非常に変わり易く、常に傘を手放せぬ感じであった。また雨は集中豪雨型ではなく霧雨状で長時間持久するから、降雨量の割に天気は冬は連日曇りが続き、3時頃には暗くなるから、lonelinessを感じることもおびたしい。また、寒冷の気候は人を自ら厳しくにさせ、思索・内省型にさせる傾向があるように感じた。しかし、大陸諸国に比べると湿気が多く、このことが人間関係にも微妙に反映して、親しみ易い人間が多い感じである。特に湿気の多い西海岸のコーンウォールやウェールズのケルト系住民にはその傾向が強い。人間性に一番影響するのは湿気ではなからうか。

イギリスの風土と国民性について、ネヴィンソン(H. W. Nevinson, 1856～1941)は、その著作“THE ENGLISH”(1928)で、次のようにいう。

「我国の気候で一番重要なことは、次に何が生じるか語ることができない、ということである。というのは、同じ1日のうちで日陰に座るように駆りたてられるかと思えば、次には火を起さなければならぬように駆りたてられるからである。また同じ1日の中に、じっと動かない霧で息がつまるかと思えば、鋭い音をたてる大風に吹かれたりするのである。我々は何物に対しても用心せねばならない。そして用心深さ (readiness) をそ全てである」。

次に、彼は南方人と北方人の違いを重視する。

「土地 (Land) 自体が人々の性格を造ってきた。その主なちがいは北と南のそれである。崖と荒野と丘——山地と呼ばれる——より成る北, “パンに塗るのにふさわしい” 豊かな平原に所々砂質の荒野と古い森とが散在している南。北では野原は自然に岩石の壁で分けられ、そして樹木は松、樅、とねりこであるが、南では生垣が野原を分ち、樹木は榎、ぶな、榎根にそって何列にもなっている榆、である。自然のこのような違いは人種の違い以上にイギリス人を北部人と南部人に分ける原因となり、性格や気質や習慣の点で非常に異ならしめている」 (THE ENGLISH, published by SEIBIDO, p. 2)。

イギリスの自然について語る場合に見落すことのできないのは、海への近さということである。元来が島国である上に、入江が至る所に深く入りこんでいるから、海までの距離はきわめて短い。距離的に短いばかりでなく、良港が多く、しかも河川の多くは内陸部まで船の溯行を許し、さらにそれらは相互に運河でつながれているから、イギリス人の海洋的性格は自然に形成されたといってもよい。もっともイギリスの国民性の大きな特色である「冒険性」の形成要因には、人種的・社会的要因があり、単に地理的要因のみを重視するわけにはゆかない。

3 人種的要因

イギリスの人種的特色は雑種であるということである。イギリスの最初の原住民はイベリア人であるといわれているが、彼らはインド・アーリア人種とは別の人種で、バスク人に近いといわれている。彼らは新石器時代から青銅器時代にかけてイギリスに居住していたが、紀元前6世紀頃から鉄器をたずさえたケルト人に駆逐された。イベリア人の遺跡はストーン・ヘンジ、アヴェベリー・ストーン・サークル (Avebury Stone Circle) 等、ウィルトシャー州にのこされている (拙著『イギリス遊学記』第3部「ブリタニア歴史紀行」、古今書院刊、参照)。

ケルト人には2種類あり、その中、ゴイデル人 (Goidels), またはゲール人 (Gaels) とよばれるものは、スコットランドやアイルランドに移住し、後にピクト人 (Picts), スコット人 (Scots) とよばれた。その後、イングランドにブリトン人 (Britons) とよばれるケルト人が移住した。ローマ帝国の支配がこの地に及んだ時 (B. C. 55, シーザーの侵略, A. D. 43, クラウディウス帝の征服), この島をブリタニアとよんだことから、現在のブリテンという名が生まれた。ローマのブリタニア支配は A. D. 404年まで続き、その間にキリスト教も伝わってきた。しかし、その影響はきわめて限られたものであったという。ケルト人はドルイド教を固く守っていたのである。そして、ローマ人は征服民の宗教には寛容であった。一般に多神教は異宗教に寛容である。ローマ時代の遺跡はハドリアン・ウォール以南の地に広く分布しているが、その中で最も有名なのはバース (Bath) の浴場跡

である（前掲拙著、第3部参照）。

ローマ軍が引上げた後、ブリタニアの地にはゲルマン人種が侵入してきた。ローマ帝政時代に平和な農牧民になりきっていたブリトン人は野蛮な武力に抗すべくもなく、スコットランド、ウェールズ、コーンウォールのような山間僻地に逃れるか、または海をこえてアイルランド、ブルターニュ半島に逃れた。しかし、ケルトの血はある程度ゲルマンのそれと混ったという。そしてこのことが、今日のイギリスの国民性に複雑性を与えた原因であるという。イギリス人の抒情的詩人性はこのケルトの血の影響であるという。

侵入してきたゲルマン人種はジュート族、アングル族、サクソン族の3部族に分れていた。ジュート族は現在のデンマークが故郷で、ケントに上陸し、一帯を支配した。アングル族はエルベ河口よりシュレスヴィヒにかけての土地に居住していたが、ブリテン島の東部に移住し、南はイースト・アングリアの地から北はフォース湾まで拡った。サクソン族はエルベ河以西の地からブリタニア西南部に移住した。ゲルマン民族の移動によって、ヨーロッパ各地に大変動が起ったが、原住民の駆逐とその文化の破壊とが徹底的に行われたのはここだけだという。これはアングロ・サクソン族の排他性が他の部族のそれよりも強かったことにもよるが、侵入者の数が相対的に多かったことにもよるであろう。しかし、それも在来民を根絶してしまう程ではなかったことは上述のとおりだし、またそれについては、多くの証拠もある（今井登志喜『英国社会史』上、22ページ参照）。

ゲルマン人の特色は森林民族で、都市文明をきらったことである。ローマ文明は都市文明であるから、ローマ時代の都市は殆んど破壊されつくした。これに対し、都市文明の本場である地中海世界へ侵入したゲルマン人が在来文明に同化したのも、風土的に都市文明なしには生活できなかったからであろう。森林民族の特色は自由民の部族的結合ということである。「森林は人をして自由ならしめる」という語の示すように、自由こそアングロ・サクソン人の最も貴重な社会的目標であった。自由民の特色はその指導者を選挙でえらび、これに絶対的な権力を許さないことである。

しかし、ブリタニア侵入後、従来の政治組織に変化が起り、世襲的な王が出現して、いわゆる「7王国時代」が始まった。これは移住・征服という行為自体がより以上の指導力・組織力を必要としたことと、ローマの帝政思想の影響が及んだということの二つが原因である。7王国はそれぞれ消長をくり返したが、830年頃、ウェセックス王家のエグバート王の時代に統一された。その主都がウィンチェスターである。この時期までにキリスト教への改宗は完了していた。それは同時に従来の野蛮民の文明化への転換でもあった。

キリスト教化されたブリタニアをおびやかしたのは、非キリスト教徒のデーン人（ノルマン人、ヴァイキング）の侵入である。彼らの最初の侵入は787年に記録されているが、以後毎年のように来襲し、遂にブリタニアの東半分に着するようになった。彼らはアングロ・サクソンとは本来同一人種であるが、異教徒である上に、航海術にたけていたので、平和な定着農民に化していたアングロ・サクソンはこれに対抗しえなかった。デーン人の慣習として長子相続制が行われ、次男以下は家を出て独立せざるをえなかったことが、侵略の大きな原因だという。後にこれはノルマン・コンクエストによって全イギリス的に制度化されて、イギリス国民性の大きな特色である冒険性の生ずる社会的原因となった。また航海術や海洋指向性もこのデーン人の侵入のもたらしたものであることに疑問の余地はない。

しかし、デーン人はキリスト教化されるにつれ、アングロ・サクソン社会と同化し、ウェセックス王家の宗主権の下に統一されていった。

1066年のノルマン・コンクエストは人種的にはデーン人の侵入と同一線上にあるが、文化的・制度的には全く異なった重大な影響をイギリスに及ぼした。イギリスの国民性に及ぼした影響についても同様である。これについては、次節で考察しよう。

4 イギリス国民性の形成

歴史家によれば、イギリスの歴史上、もっとも重要な日付は1066年10月14日のヘースティングの戦いだという。イギリス国王の座は以後、ウィリアム征服王の子孫が代々、王朝は変わっても占めることになったことを指すものであろうが、問題は、これがフランス語を話し、フランス文化を信奉する支配者による征服であったことである。ノルマン人自体は人種的にはゲルマン人であるから、アングロ・サクソン人とは兄弟関係であるが、ノルマンジー半島に定着していた間に文化的・言語的にフランス化されていたから、いわば全くの異質文化が支配者と共にやってきたことになり、その影響の深刻さはデーン人の侵略の比ではなかった。

これについて、今井登志喜は次の3点をあげている。第1に、イギリスの支配者階級の全面的交替である。アングロ・サクソン系の貴族は戦死するか亡命するかして、その領地はノルマン系のものとなった。宗教界についても同様で、高僧の地位はノルマン系に独占された。第2に、ヨーロッパ大陸諸国に比べて高度の中央集権国家が成立した。イングランドの征服に5年間要したため、臣下に与えた土地が全国的に散在したことが強大な大貴族の発生を許さなかったという。このことがイギリスの軍事力を強化するのに役立ったことはいうまでもない。元来、島国であることは中央集権国家の成立にはきわめて好都合であるが、このような歴史的偶然によって、イギリスは世界史の先登を切るようになったのである。また、あれ程外部からの侵略になやまされた国が以後、今日に至るまでそのうれいからまぬがれてきたことも、ここに原因がある。第3に、従来の孤立的の北欧文化に大陸の先進文化が輸入され、異質文化のふれあいの中から徐々に統一的な国民文化が生まれてきたことである。まず、言語の面ではフランス語を話す支配階級に対し、アングロ・サクソン語は平民の話し言葉としてしか存在しなくなった。そのため、それは名詞の性別や面倒な格変化、動詞の複雑な語尾変化を失くし、また単語のシラブルが著しく短縮化した。このことは英語の平明性を促進し、後に世界帝国の建設に伴って、世界語に飛躍する素地となった。それと同時に、英語に多量のラテン系単語が流入する原因にもなった。

この他、フランス文化の流入は学術面、宗教面、軍事面、政治面、法律面、建築面等至るところに及んだ。今日でもイギリス各地にノルマン時代の石造の大寺院や城を見ることができ、大陸との類似は一見して明らかである。

ここで、イギリスの国民性に及ぼした征服の影響を考えてみたい。前記ネヴィンソンによれば、イギリス紳士の第一条件は感情コントロールであるが、これは外来支配者の下で永い忍従生活を強いられたアングロ・サクソン系上流階層の習性のもたらしたものであろう。さらに風刺性の強い国民性が生まれたのも、弱者の精神的抵抗のもたらしたものであろう。また偽善的性格と一般にいわれる国民性も面従服背的な中世の歴史の産物であろう。

ところで、このようなフランス文化が排斥されて、古来のアングロ・サクソンのものが復活・尊重されるようになったのは英仏百年戦争（1339～1453）の敗北の結果である。この時期に近代のイギリス国家とイギリスの国民性が形成されたとみる点では、歴史家の筆は一致している。

百年戦争の原因としては、第一にフランスにおける旧領を回復しようとするイギリス国王の領土欲、第二に、フランドル地方の支配権をめぐる英仏両国の利害の対立、第三にスコットランド征服の挫折感を大陸侵略の成功によって心理的かつ経済的に（掠奪によって）いやそうという国民的風潮があげられている（今井、前掲書、125～6）。これに対し、グリーン（J. R. Green, 1837～1883）はスコットランド征服が失敗したのはフランスがスコットランドを援助したからであるとし、イングランドの悲願であるスコットランド征服を成功させ、永年の禍根を絶つたためとしている（A SHORT HISTORY OF THE ENGLISH PEOPLE）。直接の原因としてはそうであろう。戦争が長期間続いたことが物語っているように、両国民の間の憎悪感には相当根深いものがあつたに違いない。

戦争は前半（1337～77）と後半（1414～1453）に分れるが、いずれも同じ様な経過を辿った。エドワード三世と黒太子（Black Prince）にひきいられたイギリス軍は、クレシー、ボワティエの戦いでフランスを連破したが、これはイギリス軍が武力ですぐれていた上に、士気の点でも自由民ヨーマンを主力とする英軍の方が封建騎士より成るフランス軍を上廻っていたからである。然し、イギリス軍は獲得した領土の保全には失敗した。住民の人心が得られなかったのが根本原因である。後半戦も同じように最初はイギリス軍が優勢であった。これはフランス側が二つに分裂し、片方（ブルゴーニュ派）がイギリスと結びついていたからである。しかし、ジャンヌ・ダルクの出現とその死とはフランスの国民的自覚をよび起し、イギリス側の敗北に終った。当時のイギリス（イングランドとウェールズ）の人口は400万人、フランスは1500万人だといわれるから、フランスが国民的に統一されてくるとイギリスはこの点でも敵わないし、まして敵地で闘うのであるから、なおさらであった。

百年戦争の結果、大陸におけるイギリスの領土はカレーを除いて最終的に失われ、イギリス人は大ブリテン島の内部にこもらざるを得なかった。このことは二つの意味で国民感情の形成に結びついた。第一はフランスとの戦いの結果、イギリス人は地方的差異をこえて国民的統一感を抱くようになった。地方的差異による対立感よりも国民的差異に基づく対立感が強く、これは国内的対立感を解消するのに役立ったからである。第二に島国的排他性が強まった。これは何よりもフランス的なものの排斥、イギリス的なものの自覚という形をとった。イギリスとフランスとは何かにつけて国民性が反対であるが、それは国民国家形成期に両国が長期間敵味方の関係にあって、対立感が人為的に形成されたことが大いに与っている。劣等感と優越感が入り混っていたから、この感情は第2の天性となった。

次に百年戦争中にフランスに対する敵愾心から上流階級におけるフランス語使用の習慣が止み、言語の点からも国民的統一感が強められた。1362年に裁判所の用語が仏語から英語にかわり、また1363年の議会の開院式に大臣は始めて英語を用いたという。しかし、その英語には多数のフランス語が混っていた。近代英語はこのようにして形成されたのである。その英語は当時最も文化の進んでいたイングランド中部の東側（ロンドン、オックス

フォード、ケンブリッジ辺)の英語で、古代アングル族の居住地であった。ここから、**England, English** という語が生まれてきて、イングランドの国土と人全体を指すようになってきたのである。この点は大和が単に現在の奈良県を指すばかりでなく、古代日本を表現する語になったのと同じである。

このような傾向を促進させたのは印刷術の導入である。これはウィリアム・カクストンによって1477年にブリュージュから導入されたもので、知識の普及に与ること大きかった。ウィクリフによって英語に翻訳された聖書の印刷もこれによって行われ、近代英語の確立に寄与した。

さて、この英仏百年戦争はイギリスの国家的政策ともいうべきヨーロッパ政策、すなわち大陸に対する領土的野心の抛棄と勢力均衡政策の導入という点でも大きな意味を持っている。前者は大敗戦のもたらした骨身に徹する経験から得られた国民的教訓であり、後者はブルゴーニュ派とオルレアン派との対立、前者との同盟という戦争中の経験に基づくものである。この両者が一緒になって、イギリスの独立をおびやかすような大勢力が大陸に出現した場合に、その敵対勢力と同盟し、主として資金援助を通じて陸上戦闘を続行させる一方、自らは海軍力を駆使して征海権をにぎり、敵方の海外植民地を占領するという伝統的政策の出現となったのである。大陸諸国は何れもこのイギリスの巧妙な政策にひっかけられた苦い経験を持って居り、一種の不信感を抱いている。「不実のイングランド」という言葉の存在がそれを物語っている。

百年戦争の後、30年間にわたる薔薇戦争(The Rose War, 1455~1485)を経て、チューダー王朝時代になって、イギリスは文字通り国民国家になったといえる。第一に、チューダー王朝の始祖、ヘンリー7世の王女がスコットランドのスチュアート王朝に嫁し、従来仇敵の関係にあったイングランドとスコットランドとが結びつくきっかけができたことである。第二は中産階級、すなわち、ジェントル・マンやヨーマンよりなる田舎の中産階級の成立と、都市のブルジョワジーの勃興とである。チューダー王朝の基盤はこれらの中産階級の上におかれた。イギリスの国民性という場合、実はこれらの中産階級の性格をさす場合が多いが、それは彼らが国民国家形成期中核の勢力だったからである。たとえば実効性(Practicalness)という国民性はブルジョワジーに特に強く見られる。

第三に、宗教改革がヘンリー8世時代に行われ、宗教面でも国民的自覚が高まってきた。これはカソリック諸国との敵対感情を高め、この面からもイギリスの島国的排他性を強めたのである。

イギリスでは宗教的対立と経済的対立とが結びついた時、大危機が生じる、といわれるが、イギリス史を理解する鍵は宗教問題である。イギリスの宗教改革はヘンリー8世の結婚問題に始まるのではなく、実はウィクリフ(1320~1384)に始まる。彼は「宗教改革よりもずっと以前からすでに宗教改革家であり、ボヘミアのフス派の師匠で、清教徒という単語がまだできないうちからすでに清教徒である」(アンドレ・モーロア『英国史』水野・小林訳、酣燈社刊、下、283ページ)といわれ、オックスフォード大学で宗教改革を説いた。彼の弟子はロラード派とよばれ、各地を説教して歩いた。「アダムが耕し、イヴが紡いでいた時代には貴族などがいただろうか」というこの派の教義は、やがて中世の大農民一揆(1381)の強力な精神的支柱となった。これは失敗には終わったものの、農民解放を促進した。

イギリスで宗教問題が政治的変動に結びついたのは、次には清教徒革命の時である。名誉革命もまた宗教問題がきっかけだった。そして最後にアメリカの独立も本国と植民地の経済的対立に宗教的対立が加わったのが原因である。冷静で妥協的だといわれるイギリス人が一度宗教問題がからむと、打って変って激情的になる。一神教的イデオロギーには妥協がないからでもあろうが、他面では信仰の自由が全ての自由の中での最も基本的なものである以上、それを守ることは自由を尊重する国民性にとっては最も重要であったからであろう。清教徒革命の挫折後、清教徒の多くはアメリカに移民したが、彼らの子孫が独立戦争を“The Revolutionary War”とよんだのも、彼らに第二の清教徒革命だという意識が存在していたことを物語っている。これが今度は国際的規模で行われたわけである。

5 種々のイギリス国民性論 (1)

——ネヴィンソン：「イギリス人」——

次に、いくつかのイギリス国民性論をみてみよう。従来からイギリスの国民性ほど論じられてきたものはないといわれているが、これはかつてのイギリスが大帝國をきざきあげたということの他に、彼らが強い国民的個性を持っているからであろう。

まず、H. W. Nevins (1856~1941) の THE ENGLISH (1928) をとりあげてみよう。彼はジャーナリスト、随筆家、伝記作家として活躍したが、1928年のこの著作はイギリスの社会と国民性を簡潔に論じた名著として名高い。その特色はイギリス社会を構成する各階級を取上げて、その個性を分析している点にある。ここには、第2次大戦前のよき時代におけるイギリス人が語られている。

まず頂点である王室の真下に貴族がいる。これは大地主である本来の貴族とあまり土地を持たぬ称号 (Title) のみの貴族の二種に分れる。後者の中には戦争・政治・法律・工業・学術等の分野で功績のあった者が含まれるが、終身制の場合もあれば世襲制の場合もある。バロネット (baronet) の位は世襲制だが、貴族院議員になる資格はないので、どしどし与えられる。ナイト (knight) の称号は世襲制ではないからこれも同様である。その下にサー (Sir) の称号がくる。

大土地の所有はその持主に住民に対する強い支配力を与えるが、イギリスの地主は革命前のフランスやロシアの地主ほどにはきられていない。週刊絵入り新聞は王室記事以上に貴族の記事をのせ、大衆はまたこれを喜んで読む。それはお伽話を読む楽しさを与える。この理由から人々は古い家柄に対して尊敬と愛情すら抱いている。戦死や高率の相続税のせいでこれらの「お館様」は減びつつある。館はホテルやクラブや学校、サナトリウム、保護施設等に転換されつつある。何代もの野外生活や豊かな食事は彼らの多くに健康な体格やハンサムな顔や強い個性を与えた。彼らの多くは Noblesse Oblige の原理にもとづいて行動してきたし、厄介で困難な労苦を伴う公的義務に従事してきた。それは国家が彼らによき財産と快樂とを与えてきたことに対するお返しとしてであるばかりでなく、イギリス的伝統によってそうするよう期待されていたからである。カーライルは貴族制を彼らのよきマナーの故に保存する価値があると考えた。よきマナーは沈黙と自制という無限の価値ある力の上に築かれる。弁舌さわやかで身振り豊かな人々に囲まれて、私は何度我らの

貴族達の情緒抑制を祝福したことだろう。……

次に彼は上流階級 (the Upper Classes) を (1) the Squires と (2) the Professionals に分ける。これは Gentry または Gentlefolk とよばれる階級である。スカイアは小地主だが田舎の古くて美しい家に住み、貴族と交わったり、結婚したりしている。彼らの息子の中、少なくとも1人は陸軍か海軍に送られ、父祖と同じ連隊またはサービスに従事する。この階層の最も高貴な職業は軍人だという観念が子供時代から植えつけられる。実際陸軍の最良の将校を生み出したのは、この階層である。

息子達の何人かは有名なパブリック・スクールへ送られる。そしてそのうちの少なくとも1人は大学へ送られる。しかし、そこでは学習は熱心に追求されない。というのは、古くて富んだ学校になればなるほど、学習は軽んじられ、よく勉強する少年はあたかも盗みをしたか、先生以外の全員をあざむいたかのように、地位を失うからである。大学や軍の学校へ入るには特別にチューターから詰めこみ教育を受けねばならない。しかし、この種族の少年が入試に合格するか、植民地に有力な親族でもいるとすれば、彼はすぐれた行政官、または土着労働のやとい主となるだろう。というのは、馬や犬に生れながら親しんでいることは未訓練の精心の持主の扱い方を彼に教えこんでいるからであり、そして、彼が『あれを持ってこい、それ』といいさえすれば、何でもうまくゆくからである。もし、土着民が我々により近い人種の出だとすると、厄介なことが起きるかもしれないが、一般にその少年の生得の正義 (justice) 感と金銭についての正直さがうまく切り抜けさせてくれるであろう。ある時には彼の動物とのつき合いが一種の親切心を教えこむ。というのは、彼は楽しみのために殺す狐や鹿やかわうそやその他の動物以外には、めったに残酷ではないからである。この階級も今や減びつつあるが、それ故にこそ最良に見える。

次に、(2) 専門職 について、

田舎の家と密接に結びついていて、またしばしば元来はスカイアと同じ種族から生れてきたのが専門職である。彼らこそもっとも Gentleman の名前にふさわしい人間である。彼は海外でもっともよく知られているイギリス人である。というのは、彼は精神的な旅行家であり、休暇を登山や古代の都市訪問や有名な絵の鑑賞にあてるからである。イングランドが与える最高の教育を受けているのに、彼は自国語以外はめったにしゃべらない。——時々給仕は彼のフランス語に対する愚かな努力を理解しようとはするが、彼は以下のことによって直ちにそれと知れる。まず、うらやむべき衣類によって、——それは大陸の男性にとって流行 (fashion) を示す。次に、朝食の量によって、また、自分だけの食卓を持とうとする決意によって、さらに、タイムズ、パンチ (Punch)、マーマレードに対する要求によって。一般に彼は人気がある。もっとも、もはや貴族院議員とは見まがちがえられはしない。というのは、彼は自分で勘定を払い、トラブルを起さず、めったにしゃべらず、しゃべる時はしずかに、楽しげな調子でしゃべり、自分の魂の中のイングランドを決して忘れない優越的好奇心で外国の様式を観察する。

1人で旅するイギリス婦人はイギリス男性ほど人気はない。なぜなら、彼女は時折り気づかわしげに見え、荷物や勘定やチップについて大騒ぎをし、それに女性の衣服について流行の手本を示しているとは受取られていないからである。彼女は男性と同じようにしつこくはタイムズやパンチは求めないが、代りにとんでもない時刻にお茶を要求し、つねに

国民的優越感を抱いている。「外国人として私達の都市をどう思いますか」と1人の愛すべきドイツ人がライン川のボートの上でイギリスのレディに問うた時、「私は外国人ではありません、イギリス人です」というのがおきまりの返事である。

かくて、イギリス紳士と淑女とは我が道を行く。自分を嘲笑的存在だと思わないからそれには無関心である。同じように、彼らは自慢にも係わりがない。彼らは幼時から自慢しないよう訓練されている。家庭や学校で、彼らは情緒 (Emotion)、特に恐怖や愛情を表現しないよう訓練されている。同級生の前で息子にキスする母親は憎まれるに足る存在となる。そして少年は自分の父が貴族でない時には、親類がないと思われることを好む。

この自制 (self-control) 力はイギリス紳士の持っている 三つの最も高貴かつ特色のある性格の一つであり、おそらく最高のものである。というのは、それは泣き言や、ぐちや、激情の爆発や修辞から彼を救うからである。彼は危機の時、表情に静けさを保ち、過去のことをなげかない。J・S・ミルはこの抑制は衰弱による美的感動の圧殺に通ずる危険があると考えたが、私は別の危険を重視する。特に性的愛情の抑圧は情緒がせきとめられて、氷河となって爆発する危険性を生ぜしめる。

第二のすぐれた性質は賄賂の拒否である。拒否とは強すぎる表現である。それはなされもしないし、考えられもしないのである。この非腐敗性こそ帝国統治の上で最大の役に立つ名声である。他の国民に比べて、この種のことがきわめて稀であることは我々に帝国統治上、神的優越性を与える。わずか 200 年前に時の首相 (ウォルポール) は「誰にも値段はある」と自慢したが、何という変化の速さであろうか。

土着民や外国人と接するさいに、同様に価値のあるのは、イギリス紳士が約束を守るという名声である。イギリス人の言葉は多くの遠い国々でその証書と同様に信頼されている。

イギリス紳士の第三の価値ある特色はフェア・プレーの感覚である。これは彼のスポーツやゲームのさいの習慣から生まれる。このフェア・プレーについての本能はイギリス人の全生活を通じてひろまり、生活の規範となった。ある行為を「クリケットではない」ということは 道徳的非難を意味する。このたとえば フランス人を 当惑させるかもしれないが、事態を直ぐに解決する。

このフェア・プレー本能に近いのは「よいみなり」(good form) の規範である。これは主にパブリック・スクールや大学で生長してきた。これは社会的慣習の上に築かれてきたが、それを破ることは、法に対する犯罪ではないとしても、それよりも下品だとみなされる。実際、それは十戒の位置を占め、むしろ、それよりきびしく守られている。特に第4戒 (安息日を守り、聖らかにせよ) と第7戒 (姦淫するなかれ) より。この規範は習うのに非常に難しく、実際、彼らが結びついている階級との交際によってのみ、習いのである。下層階級の者は無知のためにこれに違反するかもしれないが、コンモン・ロー (Common Law) と同様無知は言い訳にはならない。せいぜい、違反者は “Natur Gentleman” と呼ばれるのが関の山だが、これ以上痛烈な非難言葉を私は想像できない。

以上の「自制、正直、フェア・プレー」の三性格の上にイギリス紳士の最良のタイプがきざれる。このタイプは、パブリック・スクールや古い大学や士官学校での訓練によって持ち運ばれてきた家族的伝統の産物である。それは多数の国教会牧師、パブリック・スクールの先生、大学の先生 (Dons)、公務員、弁護士、医者、ジャーリストを生みだすのである。このタイプの人々の間で、人はある本能的な友好性 (friendliness) —— 一種のフ

リー・メーソン性——を感じる。それは部分的には同一の風習や挙動から生じるが、主には、この階級のメンバーは他のメンバーをあざむかないだろうという正当な仮定から生じるのである。それは犬が他の犬を喰わないだろうというのと同じである。しかし、このきずなはもっと強い、なぜなら犬は極地的状態では他の犬を喰うが、いかなる気候の下でもこの種の人間によってだまされるという危険を感じることはないからである。

「紳士」のもう一つの著しい性格は「想像力に富んだ同情感」(imaginative sympathy)であって、ある時には機転(tact)として、ある時には魅力(charm)として、あるいは単に助け合いとして示される。助け合いの例として、ネヴィンソンは次のある外国の外交官の文をかかげている。

「紳士とは、沈黙、上品、威厳、スポーツ、新聞、正直の程々の結びつきである。列車の中で向いに座っている紳士は2時間もの間、貴方を一瞥にも値いしないかのように無視することにより、貴方を怒らせるであろうが、彼は突然立ち上って、貴方の手のとどかないバッグを手渡すのである。ここでは人々は互いに助け合おうとしているが、彼らは天気を除いては互いに何もしゃべらない。このことはイギリス人が全てのゲームを発明し、ゲームの間中一言もしゃべらぬ理由であろう」。

この助け合いの精神はイングランドにおける無数の慈善協会や制度によって示されているが、これはこの教育程度の高い階級の会員により支持され、しばしば指導されている。彼らはこれを自発的かつ自前でやっているのである。他のヨーロッパ諸国では政府が税金でやる援助が、英国では自発的かつ無償で行われている。しかもそれは何の反対給付も期待できない遠い国々の住人に対しても向けられるのである。

次に、中流階級について。

中流階級を、彼は The Upper Middle と The Lower Middle の2つに分ける。彼によれば、中流上層と専門職階級のちがいは、前者がより豊かでより教育水準が低いことであり、中流下層とはより豊かであるが共に教育水準が低い点で区別される。中流上層階級は50~60年程前までは「イングランドの背骨」であると激賞された。それはその指導者の言によれば、「その精力と事業と自立心とふだんに産業の新しい小路へとふみ出して行くことと、自然力の征服とで世界を驚かした」。この階層の特色は上記のような実際性であり自己満足であり、知的欲求の欠如であり、そして偏狭で非理性的な宗教である。しかし、彼らもまた株式会社の普及と息子達をパブリック・スクールや大学へやって、「紳士」に転化させようと期待することにより、消滅の道を辿ってきた。

中流下層の中には無数の書記、下級公務員、小学校の先生、商店主、労組の職員、および「黒いコートを着たプロレタリアート」——生きてゆくためには労働せざるをえないが、その仕事は厳密に手先労働ではない——が含まれる。この中には最近進出してきた女性秘書、タイピストの一群が含まれる。彼らはロンドン郊外に無限に広がる同じような街路にある何列にも並んだ小さい家に住んでいる。George Gissing はこの街路を「下等に上品な」("ignobly decent")と表現したが、その住民を下等とよぶのは酷であろう。彼らと知合になるのは難しい。なぜなら、彼らは真にイギリス的な閑居の中に引きこもっているからである。しかし、私の知人達は常に心を耕やし、知識を得、フランスやベルギーにまで旅行し、外国のニュースを聞くことを切望している。収入のゆるす限り、彼らは「文化」に通ずることは何でもしようとする。蓄音器やラジオや映画が生活の中に最高の快楽と興味を

持ちこんだのは多分この階級に対してだろう。それは彼らが「ひまつぶし」(“killing time”)をするのに大いに役立った。

「下層の者は没落を恐れない」と *Pilgrim's Progress* 中の牧童は歌った。しかし中流下層は下層ではないから、常に没落を恐れている。この階級は世界における何ものにもまして変化をおそれている。特に家庭が余りにも多くのことを意味する女性は没落を大変恐れている。彼らは例外なしに保守党に投票する。保守党 (Conservative) という語は安定を保証するようにみえる。しかし、常に危険があり、したがって恐怖がある。そして門の所にはあの恐ろしい社会主義者がいて、尊敬すべき人々をドック労働者の水準にまでひきずり下そうとおどかしている。保守党の中にこそ唯一の希望がある。

彼らに多少欠けていて、上浮階級や労働者階級に豊かなのは、のきなユーモア精神である。イギリス人特有で、特に労働者階級に滲透している諷刺に至っては、彼らは全く欠けている。彼らは人生を余りにも厳しく考え、言葉を文字通りにとる。この点で彼らはスコットランド人の性質を若干獲得したようにみえる。もし諷刺的な人が彼らの中で生活し、または公けの集会で彼らによびかけようとしたとすると、彼らは彼を疑わしげにみつめる。その様子は去勢牛 (bullock) が自分たちの野原に侵入してきた犬を見つめるのとそっくりである。

働く人々 (THE WORKPEOPLE) について

これは次の三つの主な特色によって細分できる。

(1) 田舎で働く人々 (workers) 「その中には農民 (farmer) が含まれる。彼らは労働者 (Labourer) と同じ階級に入れられるのを好まないであろうが」と都市で働く人々で今ではプロレタリアートとよばれている人、(2) 陸上および海上で働く人 (この中には水兵と漁夫が含まれる) (3) 北部人と南部人、これはつい最近まで田舎の労働者と都市労働者の区別に対応していた。

これらの労働者の性格として、ネヴィンソンは第一に持久力 (Power of endurance) をあげている。これはナポレオンが戦時における兵士の性格として勇氣よりも上位においたものである。第二に、特長的なのは諷刺の精神である。これは上流階級 (Upper Class) と労働者階級に共通な性格で、両者の絆となっている。これは災難の時や非常に危険な時に発揮される。これをよく表現しているのはシェクスピヤのフォールスタッフ (Falstaff) である。第三に、無口で身ぶりの少ない人々にふさわしいのが、語句の短縮化である。Perambulator→Pram (乳母車), Omnibus→bus (乗合自動車), bicycle→bike (自転車) などがその例である。特にオートバイの後部座席を “a peach perch” (彼女のとり木) というようなのは外国人には判りかねるだろう。

第一に、ドイツの労働者が他の大陸人種よりも以上に我国の労働者と共有している性質、すなわち、良い性質の親切 (good-natured kindliness) と怨恨からの自由 (freedom from rancour) である。私はローマ人が何故憎悪を表わす言葉 (odisse) を完了形で使うのか疑ってきた。というのは憎悪は常に過去の、終了したことがらであったからである。同じようにイギリス人の大部分は自分たちの憎悪を速やかに忘れ、怨恨または復しゅうの気持をもち続けない。この種の親切心は我々のもっとも人気のある映画や劇や本の中に病的な感傷性 (sentimentality) となつてほとばしり出ている。しかし、親切心はそれ自体悪い性質

ではない。

最後に、短所として労働者の約束 (promise and engagement) に対する一般的無関心をあげざるをえない。何度私は労働者と彼の全く利益になることについて待合せの約束をして、空しく時を費やしたことであろうか。ある時私は私自身の階級に属する仲間の一人が自発的義務 (voluntary duty) に関して待合せの約束を破った時、彼に「私は君が死ねばよいと願う、なぜなら死以外に君の欠席を許せるものはないからだ」と書いてやった。労働者にそう書いてやるのは不可能であろうが、しばしば私はそう思ったのである。

以上を要約すると、ネヴィンソンはまず貴族については、彼らが民衆から愛されている点に仏・露とは違う特色があるとし、その原因を彼らの *noblesse oblige* に求めている。その階級的な性格としては沈黙と自制をあげている。

次に上流階級として、スカイアがくるが、彼らの特色として、正義感、清廉、公正感をあげている。沈黙・自制については貴族と同様である。

次に、これと同等な階級として専門職をあげているが、ネヴィンソン自身、この階級の出であるから、一番点が甘い。紳士の名に値いするのは彼らだけであるとして、情緒の抑制、特に愛情と恐怖感を表現しないこと、正直さ (清廉さと約束を守ること)、フェア・プレイ愛好、よいマナー、同情感 (sympathy) の諸性格をあげている。

中流階級については点がからく、upper middle については、長所として実際性 (Practicalness) をあげるほかは、偽善、自己満足、知性の欠如をあげ、また lower middle については、彼らの小心性、保守性、ユーモア・諷刺精神の欠落をあげている。

最後に *workpeople* についての筆者の目は暖かい。長所として、持久性、諷刺精神、語句の短縮化、淡白性または寛容性をあげ、短所としてズボラさ (約束を守らない) をあげて、違和感をのぞかせている。

次に、ネヴィンソンは *The Interest of The English* という章で、イギリス社会に共通する性向として、まず、(1) スポーツに対する愛好性をあげている。スポーツほど全人民の興味をよびますものはない。もっとも王のスポーツとよばれる戦争は別だが、それは人民のスポーツではない。スポーツはイギリス国民をつなぐ絆である。上流階級ではスポーツはスキャンダルを除けば唯一の共通の話題である。というのは、知的または専門的会話は *bad form* (悪いかっこう) として嘲笑的懷疑を以てみなされる。そしてスポーツは *bad form* ではないのである。ある時にはそれは営利的または専門的な面さえもおびる。全階級——といっても中産階級を除くが——を通じての共通の賭けの存在がその理由である。

(2) 政治について。これはスポーツについて全人民の興味の対象とならざるをえない。イギリスの政治的伝統はデモクラシーである。第1次大戦は世界を民主化するために戦われたといわれるが、結果としては多くのヨーロッパ諸国でデモクラシーを破壊した。ただイギリスにおいてのみ、それが拡充して女性にまで選挙権が与えられた。

この後、(3) 宗教、(4) 芸街 について述べているが省略する。

(以下、次号)